

校 友 会 報

第 1 7 号

昭和45年7月15日

日本大学工学部校友会

福島県郡山市田村町徳定字中河原一

電話 郡山 2 - 1 5 6 3

郵便番号 9 7 9 - 6 6

発行人 半 沢 忠 守

編集人 水 田 守



——表紙の説明は、最終頁下段に——

御 挨拶

校友会長 武 田 仁 幸



70年の日が昇りましてから、百数十日の日が過ぎました。激動の年代などと巷間に言われておりますが、その通りであります。

この半年間起りました種々の事情、大きくは日本史上初のよど号事件、又プリンス丸事件、国際的に目を

転じますと、日米繊維問題の不調、安保の自動延長、日本もここまで進歩したのか又自立出来る日本国になったのか。この事を両手を挙げて悦ぶべき事か疑問がこのころであります。日本の経済は進歩に進歩し、世界の上位にありながら生活水準はまだまだ世界の中位である事は何かアンバランスの感じであります。

私こと昨年一年間校友諸兄達の会長の職にありながら何一つの目的すら実行出来なかつた事を深くお詫び申し上げます。

今年も再び会長職をけがすことになりました。心を新たにして校友会の目的を忘れることなく、諸兄の目的達成に邁進致す覚悟しております。今年度の目標と致しまして次の諸事業を考えておりますから、諸兄の一層の協力をお願い致します。

1. 支部結成

これは4月の定例総会を東京のデックビルに於きまして催しました折に決定しました事ですが本年度は東京支部の結成を実現したい。又、母校(工学部)が夏休みを利用致しまして、各地に学園内の近況報告を目的とした研修会を持っておると聞いておりますので、

学部長とも話し合いの結果、各理事が同行致しまして諸兄の近況を知り、支部の足掛りと致します。

2. 郡山日大会館(名称は不明)建設

当地郡山の資産家でありました橋本家から日本大学郡山学園に寄贈の土地(荒池の土地)が荒れたまま2,900坪 眠っております。この土地を利用致しまして、学部、校友、父兄達が種々の目的のために利用出来る施設を建設すべく努力したいと思っております。

3. 時計台の建設

日本大学郡山学園が開校致しましてから、20数年、本学部は音楽の都、郡山市民に愛され、名称も第二工学部から工学部へと変りました。10万坪の敷地の中に白亜の殿堂が立ち並ぶ姿は20数年の歴史を知る校友各位の胸にあつくせまるものがあります。その歴史を知らぬ一部の学生により学園の自由化を唱え破壊されましたが、自主的な解決により、立派に復旧され、平常な授業が続いておりますから、御安心下さい。話は横道にそれましたが、時計台建設の目的は折込によって御理解していただきたく思います。

四年間の学生生活を思い出し、校友会の会費からでなく、校友諸兄の各位の自主的な寄贈を目的として建設したく思いますからよろしくお願い致します。

昭和45年度、本校友会に新しく1,000余名の準会員が入会し、総会員数も老万数千余名になり、その活躍範囲は広く、政治に公務にそして又事業にと活躍されている姿は尊く、美しく感じます。校友諸兄の親睦を計り、母校の発展に一層の御協力をお願い致します。

(土木工学科第3回卒業、自営、東和工業株式会社)

第13回総会 東京に於いて開催される

おる4月19日(日)、午後1時より東京、日本橋通り、レストラン・プリンセスに於いて会員多数の出席のもとで開催された。

総会は半沢副会長の開会の辞で始まり、武田会長の挨拶、次いで議長に植木浩(電14回卒)、書記に高久田稔(電9回卒)がそれぞれ選出され議事に入った。

議事進行経過は下記の通りである。

第1号議案 昭和44年度会務報告

- 根才乍雄(機4回卒)本部評議員に選出された
- 臨時総会を開催(クラブ活動助成金の件)
- 永田前日大総長大学葬
- 学園協議会発足された。
- 時計台実行委員会発足された。

○山崎由美子事務局職員の退職に伴い新しく遠藤明美が採用された。

第2号議案 昭和44年度会計報告及び監査報告

○決算報告書(表1)により武蔵経理部長より説明があった。次いで監査を代表して太田雄八郎(土3回卒)より監査報告がなされた。

第3号議案 昭和45年度事業計画と予算審議

- 今や校友会は新しい局面をむかえようとしているので校友会の今後の進め方がむずかしい。
- 本年度は第1回卒業年度から第18回卒業年度までのまとまった名簿を発行する年であるので名簿発行費として特別に予算化した。
- 支部結成を計画中であるので組織対策費を新た

に設けた。等、会長、事業部長、経理部長より意欲的な説明がなされた。

以上、重要議案につき会員からの熱心な質疑応答の結果、原案通り可決され、昭和45年度の事業と予算が決定した。(表2)

第4号議案 役員選出

○選考委員より選出された方々を選考委員長より発表され採決に入った結果、委員長発表通りの役員が昭和45年度役員に選出され決定した。(表3)

以上審議が終り閉会とし、次いで同会場17階に於いて校友会本部長、総長、野引学部長、石田事務長等の

来賓を交えての懇親会に入った。



(昭和45年度総会の状況)

【表1】

昭和44年度 歳入・歳出決算報告書

昭和45年3月31日現在

A 運用費の部

(1) 歳入の部

△印……減

款 項	種 目	予 算 額	決 算 額	比 較 増 減
会 費	1. 終 身 会 費	1,300,000	1,536,003	236,003
	2. 入 会 金	3,000,000	4,154,900	1,154,900
繰越金	3. 前 年 度 繰 越 金	2,731,488	2,731,488	0
雑 入	4. 預 金 利 子	0	286,776	286,776
	5. 雑 入	5,000	6,000	1,000
合 計		7,036,488	8,715,167	1,678,679
	基本財産より繰入れ	1,500,000	1,500,000	0
総 計		8,536,488	10,215,167	1,678,679

(2) 歳出の部

事 務 費	1. 給 料 手 当	798,786	783,668	△ 15,118
	2. 保 險 料	71,214	71,214	0
	3. 交 通 費	173,000	158,000	△ 15,000
	4. 旅 費	77,000	55,140	△ 21,860
	5. 交 際 費	102,000	101,211	△ 789
	6. 消 耗 品 費	48,000	23,697	△ 24,303
	7. 備 品 費	150,000	149,800	△ 200
	8. 印 刷 製 本 費	75,000	50,260	△ 24,740
	9. 通 信 運 搬 費	400,000	339,874	△ 60,126
	10. 修 繕 維 持 費	40,000	35,000	△ 5,000
	11. 光 熱 及 水 道 料	13,000	9,000	△ 4,000
	12. 雑 費	30,000	20,595	△ 9,405
	計	1,978,000	1,797,459	△ 180,541

事業費	13. 会報発行費	176.320	176.320	0
	14. 名簿作成費	60.000	45.000	△ 15.000
	15. 下宿対策費	10.000	9.640	△ 360
	16. あかしや奨学費	240.000	240.000	0
	17. 卒業祝賀会費	403.680	245.035	△ 158.645
	18. 負担補助援助費	300.000	60.000	△ 240.000
	19. 旅費	50.000	20.680	△ 29.320
	計	1.240.000	796.675	△ 443.325
会議費	20. 総会費	50.000	47.036	△ 2.964
	21. 役員会費	266.000	265.122	△ 878
	22. 旅費	164.000	111.500	△ 52.500
	計	480.000	423.658	△ 56.342
予備費	23. 予備費	338.488	107.118	△ 231.370
	計	338.488	107.118	△ 231.370
積立金	24. 積立金	3.000.000	3.000.000	0
	計	3.000.000	3.000.000	0
合計		7.036.488	6.124.910	△ 911.578
学部のクラブ活動援助費		1.500.000	1.500.000	0
総計		8.536.488	7.624.910	△ 911.578

(3) 差引残額 (歳入総額) (歳出総額) (差引残額)
 10.215.167円 - 7.624.910円 = 2.590.257円

B 基本財産の部

昭和43年度からの繰越	9.477.380円
昭和44年度の利子	263.645円
運用費に支出	- 1.500.000円
運用の部より積立	3.000.000円
次年度繰越	11.241.025円

C 繰越金

A + B = 2.590.257 + 11.241.025
 = 13.831.282円

昭和45年3月31日 上記の通り報告いたします。

日本大学工学部校友会 会長 武田 仁 幸 ㊟

昭和45年4月9日 上記の通り相違ありません。

監査 太田 雄八郎 ㊟
 高野 操 ㊟
 諏佐 達也 ㊟

【表2】

昭和45年度 予 算 書 (案)

歳入の部		△印…減			
款項	種 目	予 算 額	前年度予算額	前年度決算額	比 較 増 減
会 費	1. 終 身 会 費	0	1,300,000	1,534,003	△ 1,534,003
	2. 入 会 金	0	3,000,000	4,154,900	△ 4,154,900
繰越金	3. 前年度繰越金	2,590,257	2,731,488	2,731,488	△ 141,231
雑 入	4. 預 金 利 子	300,000	0	286,776	13,224
	5. 雑 入	1,000	5,000	6,000	△ 5,000
6. 基本財産より繰入		4,600,000	0	0	460,000
合 計		7,491,257	7,036,488	8,713,167	△ 1,221,910

歳出の部					
事 務 費	1. 給 料・手 当	900,000	800,000	783,668	116,332
	2. 保 険 料	100,000	70,000	71,214	28,786
	3. 交 通 費	173,000	173,000	158,000	15,000
	4. 旅 費	70,000	50,000	55,140	14,860
	5. 交 際 費	100,000	100,000	101,211	△ 1,211
	6. 消 耗 品 費	50,000	50,000	23,697	26,303
	7. 備 品 費	50,000	150,000	149,800	△ 99,800
	8. 印 刷 製 本 費	75,000	75,000	50,260	24,740
	9. 通 信 運 搬 費	500,000	400,000	339,874	160,126
	10. 修繕維持費	10,000	40,000	35,000	△ 25,000
	11. 光熱及水道料	24,000	40,000	9,000	15,000
	12. 雑 費	26,257	30,000	20,595	5,662
	計		2,078,257	1,978,000	1,797,459
事 業 費	13. 組 織 対 策 費	300,000	0	0	300,000
	14. 会 報 発 行 費	210,000	280,000	176,320	33,680
	15. 名 簿 作 成 費	0	60,000	45,000	△ 45,000
	16. 下 宿 対 策 費	10,000	10,000	9,640	360
	17. あかしや奨学金	240,000	240,000	240,000	0
	18. 卒 業 祝 賀 会 費	300,000	300,000	245,035	54,965
	19. 負 担 補 助 援 助 費	300,000	300,000	60,000	240,000
	20. 旅 費	250,000	50,000	20,680	229,320
計		1,610,000	1,240,000	796,675	813,325

会議費	21. 総会費	443.000	50.000	47.036	395.964
	22. 役員会費	250.000	230.000	265.122	△ 15.122
	23. 旅費	200.000	200.000	111.500	88.500
	計	893.000	480.000	423.658	469.342
予備費	24. 予備費	410.000	338.488	107.118	302.882
	計	410.000	338.488	107.118	302.882
積立金	25. 積立金	2.500.000	3.000.000	3.000.000	△ 500.000
	計	2.500.000	3.000.000	3.000.000	△ 500.000
合計		7.491.257	7.036.488	6.124.910	1.366.347

昭和45年度 名簿発行特別会計予算(案)

歳入	歳出	
	予算額	差引額
基本財産より	2,100,000	0

以上の通り提案いたします。

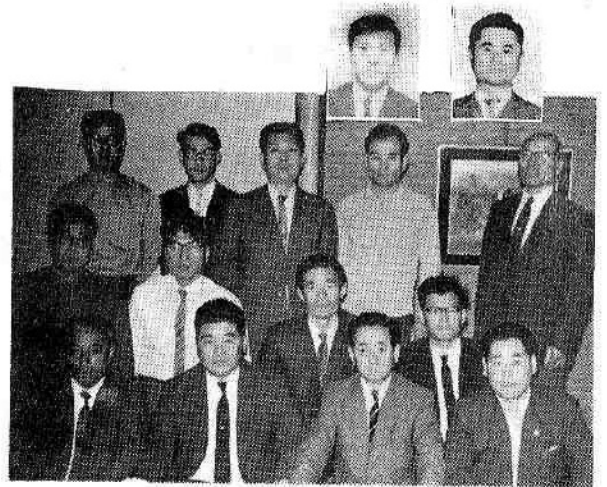
昭和45年4月19日

日本大学工学部校友会会長 武田 仁 幸

【表3】

昭和45年度役員

役名	卒業	氏名	役名	卒業	氏名
会長	土木3回	武田 仁 幸	評議員	建築11回	富田 和 夫
副会長	電気2回	関根 昭 一	評議員	機械3回	塚原 健 二
副会長	土木3回	太田 雄 八 郎	評議員	機械13回	斉藤 清 義
事務局 長	化学6回	半沢 忠 忠	評議員	電気4回	橋本 久 浩
理事 事業部長	建築5回	斎藤 久 志 郎	評議員	電気14回	植木 世 夫
理事 経理部長	土木8回	武藤 真 泰	評議員	電気14回	伊藤 宣 道
理事 理事	電気3回	釣 卷 旦 男	評議員	化学2回	篠崎 敏 彦
理事 理事	機械4回	根本 年 雄	評議員	化学14回	小川 義 美
理事 理事	土木4回	石井 一 栄	評議員	化学15回	小林 義 美
理事 理事	機械4回	水田 守 正			
理事 理事	電気4回	山岸 利 正			
理事 理事	化学5回	平手 仁 正			
理事 理事	機械9回	佐藤 光 正			
理事 理事	建築15回	馬場 彦 吉			
監査 査査	機械2回	菅野 宗 和			
監査 査査	化学3回	高野 操			
評議員	電気9回	高久 田 稔			
評議員	土木3回	松山 光 克			
評議員	土木5回	鈴木 光 保			
評議員	土木5回	小山 田 克 己			
評議員	土木17回	小吉 野 一			
評議員	建築3回	木村 圭 二			
評議員	建築7回	小栗 治 男			



海外出張記

日本大学教授 宇野原信行



校友会からの御要望でペンを取ったが、何分にも生来の筆不精の上、例に依って類を見ない駄文になる恐れもあるし、また出発したものが一昨年のため記憶から書く部分には間違いがあるかも知れぬが御容赦でき度い。然し乍ら学部第一

回卒業生から教鞭を執った小生にとって此の紙上を通じての機会が与えられた事は非常に欣しい。(写真に見られる如く頭髪は薄くなったが、精神的な若さは今も昔と何ら不変の積り)

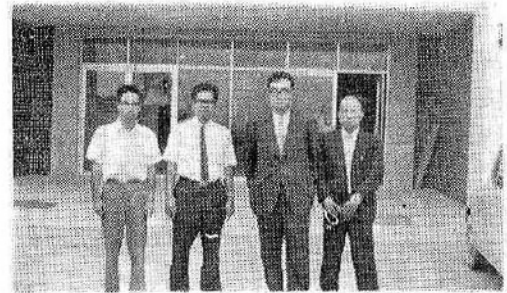
前措きは擬て置き、先づ旅行機関の飛行機であるが国から国を移動するのに全部空路を取った為、前後二十数回程も利用したが、前に大東亜戦争中に一度陸軍の重爆の試験飛行に便乗させて貰った経験からすると余り特別の感慨も湧かないが、ただ離陸時の豪快さと比較し着陸時とくに羽田に帰る際などは室内のライトを消し静寂が流れた数十分は不気味と云うより他はなかった。雲海上の飛行や長距離の場合に昼もしくは夜の切り換えが伸び伸びになること等は当然ながら飛行中に機内で映画(ムービー)を上映する辺りは一才意想外であった。

廻った国々は沖繩、台湾(台北と台南)、香港、トルコ(イスタンブール)、イタリー(ローマ、フローレンス、ミラノ)オーストリー(ウィーン)、スイス(チューリッヒ)フランス(パリ)西独(ボン、ケルン)デンマーク(コペンハーゲン)、スエーデン(ストックホルム)、ノールウエー(オスロー)イギリス(ロンドン)最後が米国(ボストン、ニューヨーク、パツファロー、ラスベガス、ロスアンゼルス、サンフランシスコ、ホノルル)で八月中旬に出発し十月中旬に帰朝した。必要な出張旅費は支給されたが、昨年の大学本部発行の「海外出張報告書」に帰国日を迂闊にも実際より一ヶ月早く書いて了った。(校友会誌上で訂正するのは筋ではないが)

兎もあれ地球を一周した訳で恐らく私の生涯にそう何度も訪れる機会ではないから記念すべき貴重な経験で、感謝の気持を念頭に刻まねばならぬが、今年より他ならぬ本学部卒業も選ばれるやうになったので向後ますます「広く知識を世界に求める」校友会諸氏が続々増えるであろうし、それが畢竟工学部発展の一助にも継がり願ってもないことである。

擬而、紙面の都合上、簡略に旅行々程の順序に従い

ながら訪問大学の説明をして行くと、先づ沖繩では琉球大学であるが日本の各県に存在する新制大学のレベル程度(戦前の師範の格別したもの)と思われるが、化学の兼島教授から南極の石を見せられた事が印象に残る。尚、この期間中、当学部の卒業生の仲村将市君(琉球政府勤務)他数名の校友諸氏に大変世話になった。特に記して謝意を表したい。



場所 琉球大学理工学部前
左より 仲村将市君(本学部卒、琉球政府公務員)
兼島教授(琉球大学化学科)
本間教授(日本大学工学部電気工学科)
筆者

次の訪問地の台湾では、高工時代の恩師頼再得教授ほか多数の人に会えたが、アメリカの大学の姉妹校としてよく提携され研究実績もポラログラフの分野で相当な成果を挙げられ、若い研究者も大半は米国に留学し、学生は英語が達者でこの国の化学論文は総べて英語であった。又この成功大学の規模は膨張に膨張を重ね目を見張らせるものがあるが、国の現状が臨戦体制にある為、兵役義務のほか街々の掲示にも緊張が窺える。その後香港に向ったが、離日前の予防注射の膨れが仲々縮まらず非常に身体的に閉口しヨーロッパの学校ではフランス(ソルボンヌ)とドイツだけに止った。

ボン大学では鮮やかな緑の芝生の校庭に著名な有機化学者ケクレの銅像が立派に見え、校舎内の地下室の機構が見事に発達し、研究室内の見学は白髪のデュハル教授が自ら当られた。(英米では全部当該大学に勤務中もしくは留学生の紹介を受けて案内された)

英国のオックスフォード大学で留学中の宮様のmy-carを教えられたり、校内を流れる清冽な川が憶い出されるが、建物はクラシックなのが多く(工科系は別)、組織は文科系がスクール制で自然科学系では学部制と云うより、例えば化学関係では我が国の医学部、農学部、理学部、工学部の夫々に属する化学を全て集めて一つのカレッジ制にする方式であった。復、教養課程では寮生活を通じての教育が徹底している。欧州では例の2階建電車や自動車を見たが、タクシーは乗合制(見知らぬ他人が既乗車中でも席が有れ

塩素混和池 — 浄水池 PC 構造
R=25m Q=2000m³

配水管 SP 配水池 PC 構造
D=600mm L=7000m R=40m Q=8800³

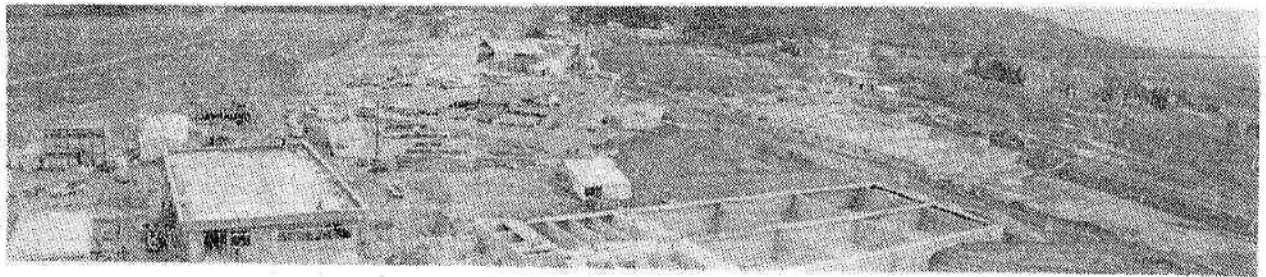
配水管 SP 各家庭
D=600mm L=10.000m

建 物
管 理 事 務 所 750m² 2階建
自 家 発 電 機 室 72m²
塩 素 滅 菌 機 室 90m²

以上であります、次報にはパトンを上水道部門関係の方をお願いして失礼いたします。

(筆者 土木工学科3回卒業、本会
評議員、郡山市水道局勤務)

(堀口浄水場全景)



海中公園潜水調査報告

石 井 一 栄

▲1. 調査概要

昭和44年11月17日より11月23日迄、高知県土佐清水三崎町竜串爪白浜地先の弁天島周辺における海中公園施設計画に伴い、調査隊一行8名が調査をした結果をここに報告し、今後の日本に於ける海洋開発進展に関

する皆様の関心の一こまとして頂き度く次に述べさせて頂きます。

- (1) 調 査 名 : 足摺海中公園予定海域施設計画に伴う環境基礎調査
- (2) 調 査 場 所 : 高知県土佐清水市三崎町爪白浜地先
- (3) 委 託 者 : 高 知 県
- (4) 現 地 調 査 期 間 : 昭和44年11月17日～

昭和44年11月23日

調 査 日 誌

日	場 所	天 候	気 温	風 向	水 温	海 深	潜 水 者	潜 水 時 間	作 業	備 考
18	弁天島 遊歩道	晴	21°C	南東	18°C	5m~15m	田 中 太 三 浦	午前 2回 1時間30分 午後 2回 2時間	潜水撮影	22日 午前潜水 海底採砂
19	〃 北 側	曇	20°C	北	〃	〃	〃	〃	〃	
20	爪白浜	雨	18°C	北東	〃	〃	〃	〃	〃	
21	〃	曇晴	18°C	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

(5) 調 査 項 目

- ① 海底地形調査 捷息魚の種類、海藻類調査を含む
- ② 時刻別日照度調査
- ③ 海水の流向及び流速、海水比重の調査
- ④ 網仕切の位置及び方法
- ⑤ 海洋自然水族館の遊歩道施設に及ぼす影響

(6) 調 査 者

山 下 弥三左衛門 三 浦 敏 彦
石 井 一 栄 池 田 敬 太 郎
田 中 竜 彦 池 野 亘
太 田 昭 彦 町 田 昭 義

▲2. 海底地形調査

①水中測深調査

(1)測定範囲

A地区……50m×50mの方眼測定方式をとり弁天島南200m沖迄と西側は500m迄を測定区域とした。

B地区……10m×10mの方眼測定方式にて弁天島北端東200m 対岸迄の区域を測定範囲とした。

(2)測定結果

添付図参照

・水中測深図

・水中等深図

②潜水地形調査

(1)測定調査範囲

添付図面の①～⑨ブロックに区分し潜水調査を行なった。

(2)潜水調査概要

地区	岩礁、底質状況	海生物	魚類	景観	深度	潜水による透明度	参考
①	起伏が著しく陸地の根の延びが平行で凹地は砂	テーブルサンゴの発達が多い 海藻類も繁茂	コバルトスズメ ネンブツダイ イセエビ ツノダシ	陸地と同方向に根が延びて変化に富み美しい	3.0m～4.0m多い、一部7.0mの所あり	透明度が良し	②③地区よりテーブルサンゴが小さい
②	⑤地区との水路となり起伏が大きい	テーブルサンゴ類 ①地区より大形海藻類少い		根の発達した西側は変化に富み美しい	一般的に4～5m、一部9.0mあり	①と比較するとやや劣る	①地区より少し大型のサンゴが多いが③よりは小さい
③	最も起伏が著しい砂原が多くみられる	テーブルサンゴが最も大きい 海藻なし	クマノミ、ツノダシ、チョウチョウタカノハ、ニザダイ、ベラ	サンゴの発達が一番良く美しい	9m～10m	〃	サンゴが大きく岩礁につく状況が一番すぐれている
④	起伏に富み砂原の面積も大きい	海藻類少なく根の浅い部分にサンゴがある	イセエビ、コバルトスズメ、ネンブツダイ、ベラ	海ケイトーの群生が特に美しい	8m～12m一般的に深い	〃	④地区のみに海ケイトーがあり美しい
⑤	起伏は細くあり弁天島寄りには転石あり	サンゴは弁天島寄りに多少みられ海藻類少ない		一般的な変化のない眺めである	4m～6m	浅い割によくはない	
⑥	砂利層で沈澱物あり	なし		悪い	4m～9m	〃	
⑦	⑥に同じ	なし		〃	5m～6m	〃	
⑧	根の突出部分あり転石が多い(弁天島寄り)	小型サンゴが転在している		突出根部分に小型サンゴがみられる	4m～5m	〃	
⑨	岸よりの根があり礫層、砂原をなす	根の所にサンゴがみられる		B地区では一番良い	4m～10m	〃	B地区では一番変化に富む

各地区共に連続的に景観が共通しているが、特に(2)、(3)、(4)地区はサンゴ礁が林立し熱帯魚も多数棲息しており、色彩も豊かで最も景観にすぐれている。

沖合には根付魚が魚礁に寄棲しているので、遊歩道予定海域に誘導する等の配慮が望ましい。

考察

A地区

①地区は海岸線より岩礁が著しく発達し、根の方向が海中に延びている。また、海藻類の繁茂がみられる。景観はサンゴ礁が発達し、②、③地区に劣らぬ様にみられた。根と根の凹地には荒目の砂が堆積しており、B地区にて採取した砂よりは荒くシルト分を全然含まずB地区でみられる様な沈澱物についても全然みられない。

②地区は爪白海岸よりの突出岩礁起伏岩根には階段状にテーブルサンゴが発達しており、大きいものは1 m以上のものがみられる。中でも弁天島西北端はテーブルサンゴが重なり合って発展し景観としては最もすばらしい。また、写真で見られる様に魚のつまもこの周辺は多くみられる。水深はこの辺は複雑なので添付図を参照のこと。岩礁の根の走りは陸上の岩の走りと平行に4~5 mの間隔で突出している。

③地区は、②地区と同じで、景観も良いが岩礁根が分岐し、根と根の間は砂で被われており。岩礁根にはサンゴが発達している。

④地区(弁天島南端西側)には、岩礁根が著しく発達し、特に目立つのは海ケイトウが群生し紫赤色あざかである。また、岩礁根が急激に落ち込み、水深も10 m以上に及び底部は砂となっている。

B 地区

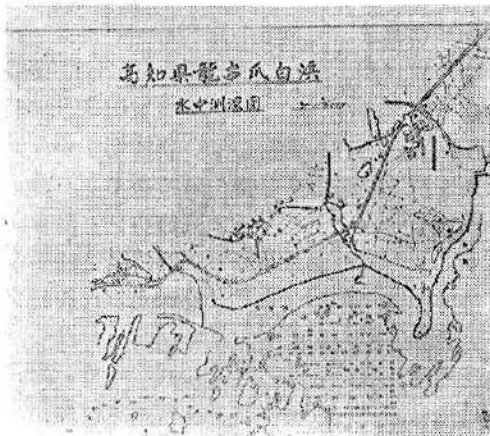
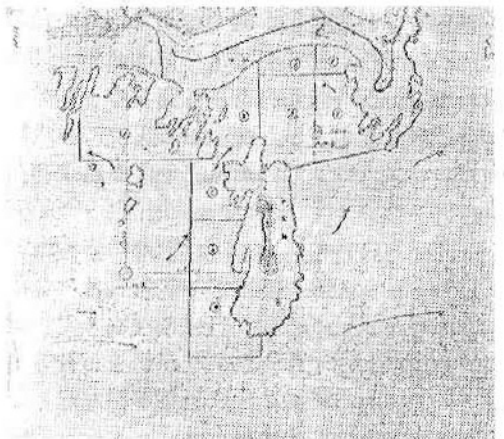
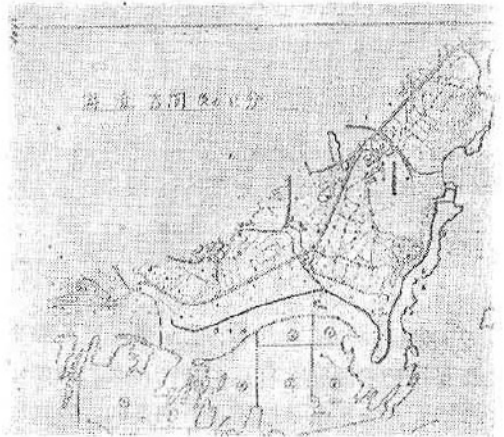
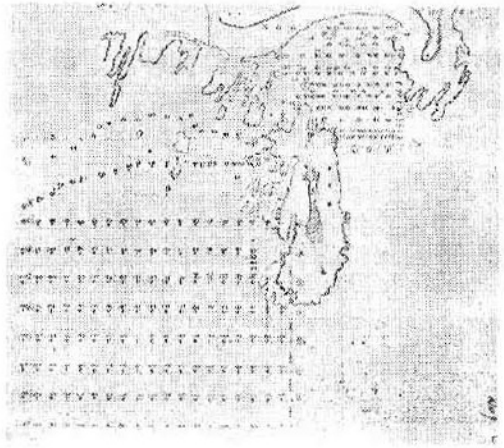
⑤地区、A地区とB地区とを結ぶ唯一の水路区域であり、水路の両側は岩礁の起伏が著しく、サンゴ礁は小型のものが発達している程度である。また、爪白浜海岸寄の砂礫質のところではケ所深くほみ(12 m)が発見されたが、これは沿岸流(波の接近に抗して流れる流れ)の影響によるものと思われるので、今後の調査で追究する必要がある。

⑥地区及び⑦地区

当地区は、海岸の砂が海中にそのまま延長しており、海岸線に沿って深みを形成し、水深は3~4 m程度で4 m位の深いケ所には水あか状の沈澱物が堆積しているので、濁水化する傾向がみられた。

⑧地区(弁天島北東)は、水深も浅く4~5 mで所々に小型のテーブルサンゴが転在している程度で、弁天島北東水際線より20 m範囲に岩礁の発達がみられ、その他は殆んど砂原と礫岩状の岩礁ブロックが点在している。また、⑨地区寄に突出岩礁が点在し、テーブルサンゴが部分的にみられている。

⑨地区は、陸岸が急に深くなり、9 mにも及び底質は岩礁でサンゴがついている程度である。



▲3. 時刻別日照度調査

(1)概況

A地区とB地区を照度測定結果より区分して考えると海底の底質及び潮の流れが異なる様に、A地区B地区では照度にも差が測定される。

海底建造物の建設に当りA地区とB地区を照明度より次に考えてみる。

(2)調査考察

11月13日(快晴)午前12時のA地区での照度は水深8mでも5,000 lx以上もあり、測定不可能であった。20日(雨)午前8時の測定は、下表の通りであった。

11月20日(雨)船上2,500 lx 単位 lx 100

水深	A地区	B地区
2 m	1,150	1,100
3 m	890	700
4 m	710	550
5 m	600	
6 m	500	
7 m	420	
8 m	360	
9 m	300	
10 m	260	

21日の天候は晴であったが、雲が多く、太陽光線の変化により海中の照度も著しく変化した。別表の測定表からみて、A地区はB地区より明るい、これはA地区は外洋であり、B地区は湾内であると云う位置的条件差が考えられ、B地区は海水の汚濁及び浮遊物による光の乱反射等によって照度が落ちるものではないかと判断される。太陽光線が海中への入射時の屈折により自然光のみでの可視時間帯は非常にせまく10時~14時が最も明るい。入射角が小さくなるにしたがって海中は急激に暗くなる。また海中での光色は、太陽光線の輝度の最も強い時でも10m以深では赤色は存在せず褐色となる。

したがって自然光の弱い時には、海中景観は海色に影響され、カラー写真、映画等で見られるように色彩豊かなものでなく単色の暗い景観となるので、対象物への補色照明が必要ではなからうか、又これらの照明は、曇天、雨天時にも効果的な景観を得るだろう。

(3)透明度と海中視達距離

透明度は海面から海中明度を読取る仕組みであるが、透明度と海中明暗層の海底現象と海中視達距離は連鎖反応によるが必ずしも同指数でないことを潜水人は体験した。海中公園の景観は海深度の明度、色相、彩度による高度の観光が要望されるので、海底反射光線の明度を理解することが必要である。海底遊歩道、水中観光塔により海底景勝を観賞するには海中視達距離の大なる程、観客に喜ばれる。海中視達距離は気象、海況により太陽光線の時刻による入射角に影響する。

照度測定表 (B地区) 11月21日

測定時刻	8:40	10:10	12:10	14:30	16:30
陸上照度	10,000 lx	30,000 lx	40,000 lx	45,000 lx	10,000 lx
水深					
1 m					
2 m	2,500				1,650
3 m	2,000	4,250			1,550
4 m	1,500	2,500	4,000	4,100	1,400
5 m	1,200	1,900	3,500	3,800	1,200
6 m	1,000	1,600	2,750	3,500	1,000
7 m	800	1,400	2,100	2,400	930
8 m	650				

◎11月21日 天候：はれたりくもったり
透明度：前日の降雨により海中の水平透明度5~6mと悪かった。

4. 網仕切の位置及び方法

(1)概況

海洋自然水族館に予定されているB地区は、弁天島と長島半島につつまれた小さな湾を形成し、風波の影響が一番すくない海域と思われる。

湾内の環境については、総面積約35,000m²であり、水深は大体4mから11mまでとなっている。湾内への潮流は、弁天島北側(水深3.5m~6m・水路巾30m)と、弁天島東側(水深4m~12m・水路巾170m)の2ヶ所からの流れ込んでいるので湾外との環境差は殆んどみられないものと考えられる。また海底地形をみると、中央区域には急激な変形(凹凸を含む)もみられず、その殆んどが砂面によって占められている。又、⑥、⑦地区において一部沈澱物の堆積層が発見されたが、これは将来自然水族館として魚類を蓄養する場合濁水化の要素を秘めているので、魚の放養については蓄養魚類の実態を十分考慮して除去する等の方法も考えることが望ましい。

(2)網仕切り

湾全体を自然水族館として活用するには、先づ魚類の逃避防止が重要視されるが、その方法としては、築堤(一部築堤方式も含む)及び網仕切りの二方式が考えられるが、いずれも一長一短であろう。

まず、築堤方式は台風時の波浪防止と云う面に有利性があるも、反面潮の交流率が低い(特に小潮時の場合)ので赤潮の危険性を伴うと考えられる。又、網仕切り方式は、潮の交流率が良い反面、台風時の波力に対する耐久度が弱いと考えられるので、施設については利用目的と施設規模並びに蓄養魚種及び尾数等から勘案し、且つ保安管理上からみて慎重に検討され

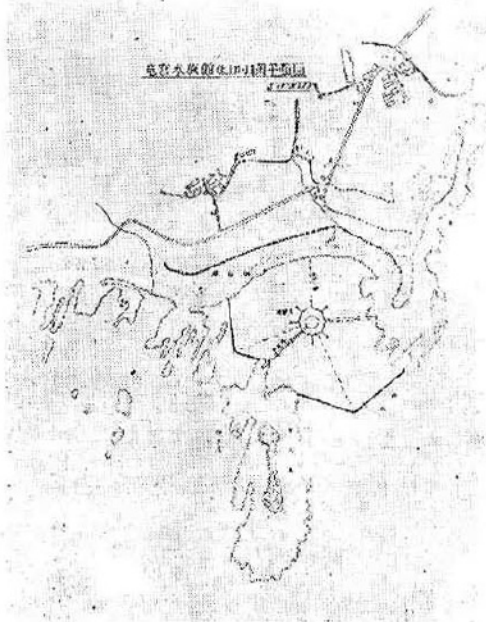
るべきものと考えられる。また外洋に面する網仕切り方式は、波浪防止並びに破網の安全対策と潮流の流入を容易に出来得る様な特殊な二重網仕切りが望ましい。

(3) 網仕切りの位置

網仕切りの位置としては、(別添図参照) 弁天島東側と長島半島を結ぶ最短線に施設する事が可能であり、また、弁天島北側については、岩礁地帯と水路狭隘のため破網の危険性をはらんでいるので、海底地形のよい湾内寄りに施設することが望ましい。

(4) 魚類の蓄養

自然水族館は、蓄養計画によって運営されるとの事であり、魚種は多種で且つ大、中、小型の蓄養形体となろう。従ってこの場合は魚類の習性等を十分考慮して、適正管理に努めると共に海象変化には十分な措置を講ずる配慮が必要と痛感するものである。



▲5. 海洋自然水族館の遊歩道施設に及ぼす影響

海洋自然水族館を施設する場合、海中遊歩道施設に何らかの影響をおよぼすかどうかを検討する必要がある。

海洋自然水族館の施設予定地は弁天島と長島半島に囲まれる湾内(B地区)であり、海中遊歩道施設の予定地である弁天島西南側とは400~500m程度離れている。また、海中遊歩道施設は外海に面し、潮流は別図(海流方向および区分)に示す如く、弁天島西側から爪白浜湾に流れ込んでおり、海洋自然水族館を施設したことによる潮流方向の変化とか、漂砂移動の変化などを含めて遊歩道施設に及ぼす影響は考えられない。

むしろ、逆に遊歩道施設が施設されることによる潮流方向の変化と言う意味から、これが海洋自然水族館に影響を及ぼす可能性が考えられるが、この点も施設位置から言ってほとんど影響がないと云える。

また魚類の生息状況からみても、A地区の魚類はサンゴ礁に生息するものであり、環境的に異なるのでB地区の海洋自然水族館の蓄養計画については海中遊歩道施設(A地区)に影響を及ぼすことはないと考えられる。

以上は調査内容の一部であります、水中写真も、770枚を撮り別冊に保存してありますので、御希望がありましたら、校友会の折にでも御覧に入れたく考えて居ります。

私も生れて初めて海中のほんの一部をのぞかせて頂き、海中、海洋の美しさとその神秘性、自然に対する生物の諸反応現象には只々驚くばかりでありました。

これを機会に今後、日本の大陸棚の開発、水産、地下資源開発等数知れぬ広大な分野に校友の皆様も研究貢献されます様望みます。

(筆者 土木工学科第4回卒業、本会理事)

大洋開発株式会社 代表取締役)

場所打杭について

佐々木 則夫



最近都心に於ける公害問題がきびしくなり特に工事現場に於ける騒音、振動等が注目の的になっている現状である。

これ等の問題のほとんどが杭打、シートハイル打込等であり、古くから用いられてきた基礎工法である。

今日に於ける建築物はマンションブームにより人家

の密集した狭い土地が多く打込工法では附近住民に不快感を与え、隣接建物を破壊させ工事途中中止という例をしばしば聞いている。以上述べた問題の解決策として最近急激に発展して来た場所打杭について最近実施した例を上げて見る。

現在使用されている場所打杭工法として特に目立つ工法は、

1. カルウェルド工法
2. ベノト工法
3. リバースキューション工法

④ アースオーガー工法

その他各大手会社が開発している工法がある。これ等の掘削機は運搬がトレーラーもしくは大型トラックで運搬しなければならず搬入路の狭い新築建物がマンションブームにより特に増えて来たので、掘削機が小型でしかも2t車に於て充分施工出来る工法について検討して見る。これは最近当社で開発と研究を重ねているN.B.P工法であります。

油圧式のボーリングマシンに羽ビットを付けて掘削する工法であるが、場所打杭全般に渡って欠点とされている杭先端のスライムの問題の解決工法である。

1. N.B.P工法の概要

NBP工法は安定液穿孔による無音無振動工法であるが、二つの大きな問題点がある。一つは孔底に沈積するスライムの問題であり、もう一つは垂直精度の問題である。後者については施工者の細心の注意力により、かなりの精度(最大100/1)を保つ事が出来るが、前者は技術云々以前の問題である。スライムは掘削完了から鉄筋籠建込コンクリート打設作業までの時間を短縮すればする程、その沈積量は少なくなるが、籠の建込時間、コンクリート打設時間は無視出来ぬ程大きい。スライムは穿孔完了後経過時間が0~30分で極限スライム量(定常状態にあるスライム量)の約50%が沈積し、60~90分で定常状態になり、その量は1m前後である事が判明した。

スライム除去する方法は、エアリフトにより除去する方法やウォータージェットを利用する方法等、種々考えられているが、孔底の地山の崩壊の危険性が大きいし、又これらの除去も完全でない。つまり現状では確実な除去方法はない。通常ピアの支持力は先端支持力で決定される。即ち周辺摩擦力を考慮に入れる事は出来ない。これは穿孔にベントナイトケーキが形成される事によるもので、ベントナイトケーキの摩擦力を考慮に入れる事は確立されていない現状故である。構造物の低盤コンクリート部分の弾性変形量を15%と仮定した時、ピア先端地盤の短期荷重時の許容沈下量を10%と考えると、上記スライム量の過大な点を考えると施工が相当困難であり、且つ危険性が甚大である。

以上の問題に対する解決工法としてNBP工法である。この工法は薬液注入工法の併用を利用し、コンクリート打設と同時に、あらかじめ鉄筋籠に溶接しておいた注入パイプにより杭先端注入を行う工法である。注入による効果は先端スライムを固結させ、杭の支持力を増強させると共に薬液とベントナイトのゲル化により杭の周辺摩擦力の増強を計るものである。

2. Quick Sand 及ブリージング現象

砂層礫層を施工する場合のNBP工法は、穿孔中、Quick Sand 現象が起り、孔壁崩壊の危険が相当大きい。オールケーシングのベント工法と異なりNBP工

法は安定液(ベントナイト、セメント液)を用いる工法では孔壁崩壊は極力避けねばならない。この点についても薬液注入併用は孔壁を保護し且強化の目的を有する。

次にブリージング現象であるが、場所打杭にかかわらず、すべてのコンクリート打設に伴う問題であるが特に地中に於けるコンクリートはブリージングが非常に起りやすい。これ等の現象により孔壁が小さくなりだんご型式の杭にもなりかねない。注入による効果はブリージングを早く進行させ孔壁の保護を完全に行うものである。

3. NBP工法によるK値の増大

NBP杭の横方向に対する耐力即ち水平耐力について検討する。今仮にφ500×ℓ15.000MのNBP杭に対する検討であるが横方向に対する杭の抵抗深度は、-5.000m位であるので、これについて検討する。

$$\text{転倒モーメント } M = W \cdot H$$

$$\text{杭の断面} = \text{次モーメント}$$

$$I = \Sigma \cdot y^2$$

$$\Sigma I = 1232.8$$

$$Z = \frac{\Sigma I}{r} = 123.3$$

$$\lambda = \frac{M}{Z} = 54t$$

$$\text{長期転圧 } N = 72.5t$$

$$\text{短期 } N' = 126.5t \text{ or } 18.5 \text{ (引抜)}$$

以上により横方向K値(粘性土として0.4と仮定する)により杭上部(-5.000M)の安全度は

$$\beta = \sqrt[4]{\frac{KD}{4EI}}$$

$$E = 1.4 \times 10^6 \text{ kg/cm}^2$$

$$I = \frac{\pi}{64} D^4 = \frac{\pi}{64} \times 50^4 \\ = 306.641 \text{ cm}^4$$

$$k = 0.4 \text{ kg/cm}^3 \text{ とすれば、}$$

$$\beta = \sqrt[4]{\frac{0.4 \times 50}{4 \times 1.4 \times 10^6 \times 306.600}}$$

$$= 3.3 \times 10^{-3} \text{ cm}^{-1} = 0.33 \text{ m}^{-1}$$

$$\text{杭頭拘束モーメント } M_0$$

$$M_0 = \frac{H}{2\beta} = \frac{218}{2 \times 0.33} = 33.1 \text{ t.m.}$$

$$\ell = \frac{M}{N} = \frac{33.1}{126.5} = 0.262 \text{ m}$$

$$r = 25 \text{ cm, } r' = 25 - 7 = 18 \text{ cm とする}$$

$$\frac{r'}{r} = \frac{18}{25} = 0.72$$

$$\frac{l}{r} = \frac{26.2}{25} = 1.048$$

$$A_s = 12 - D_{20} = 12 \times 38.7 = 46.5 \text{ cm}^2$$

$$P = \frac{A_s}{\pi r^2} = \frac{46.5}{3.14 \times 25^2} = 0.024$$

「ノモ式より」

$$K = 1.90 \quad [C] = 0.68$$

$$\text{コンクリート圧縮 } \lambda_c = \frac{N}{[C] r^2} = \frac{1.26.500}{0.68 \times 25^2} \\ = 298 \text{ kg/cm}^2$$

$$\text{鉄筋引張力 } V_s = \frac{n \lambda_c}{R} \left(1 - K + \frac{r'}{r} \right) \\ = \frac{15 \times 298}{1.96} (1 - 1.00 + 0.72) \\ = 1642 \text{ kg/cm}^2$$

以上計算より見ると、コンクリート圧縮強度が、 298 kg/cm^2 、これは 210 kg/cm^2 の生コンクリート打設によっても横方向に対して耐える事が出来ないが、上部粘性度のK値の増大は直接水平荷重に影響するので、注入による増大 (0.4~0.9) で安全側になる。

4. まとめ

N. B. P工法採用による効果は、

- ① 杭先端のスライム問題の解決
- ② 杭周辺摩擦力の増大及クイックサンドブリージング現象の防止
- ③ 杭頭 (-5.000M) に於ける横抵抗の増大

(筆者 土木工学科 第10回卒業
日新開発工業株式会社勤務)

＝ 校 友 だ よ り ＝

東京における初の総会に出席して

石 島 秀 雄



日々の野暮用に使われ追まわされていると気になっていても、地方で行なわれる校友会総会といったようなものには、なかなか出掛けられないものです。

愛校心が稀薄であるなどと四角四面に開きなおられるとはなはだ困るのですが

未だかつて一度も顔を出したことはありません。

しかし、時おり几帳面に変わった住所を追いかけて送られてくる会報をむさぼり読み、望郷の渇をいやしている自分に気がつくことがしばしばです。

紙上のそこ、ここに親しかった懐かしい連中の名前を見だし、ひとり相好をくずしている図などは女房にも内緒です。

早いもので卒業以来十数年、同期の桜の顔も次第に記憶がうすれがちなのはいたしかたのないことなのでしょう。愚かなる人間の悲しき宿命です。

ことしの校友会総会を東京で開くとの通知は私にとってこの際まことにうれしい話で、早速いそいそと出かけることにしたのはいう迄ありません。

期待通り、会は盛大且つまことに楽しい会で、久しぶりにあの顔、この顔、なかには変化の大きな頭や顔もありましたが、大いに話がはずみ旧交を暖めること

が出来ました。又各人それぞれの分野ではなばなし近況と同時に元気だった何人かの友の計報も耳にし十数年の月日の短くないことを痛感しました。

あれやこれやで、柄にもなくおしゃべりばかり、申し訳ないことですが校友会幹部苦心の事業報告とか会計報告とかは正直なはなし右の耳から左の耳へすいっと通り抜けてしまい、頭のなかには楽しかった友人達との会話しか残っていないような始末、汗顔の至りです。もっとも本来これはそういう会であってしかるべきなのかも知れません。

学部長の野引先生にも初めてお目にかかりました。ひとりひとり大きな声で話しかけられ、ビールをついで廻っておられた姿が印象的でした。豪快闊達なお方とお見受けし、今後の工学部を安心しておまかせできるお方と大いに意を強くした次第です。

このたびの総会を東京で開いて下さった現校友会幹部の方々の英断に満腔の謝意を表するとともに再びこの機会のあらんことを切望いたします。

(筆者 建築学科3回卒業

KK伊藤喜三郎建築研究所勤務)

グライダー部OB会のあれこれ

長 沢 正 義

いつのまにか、自然発生的に集まってきた。翼を愛し、飛ぶことのすばらしさを知った仲間が、先輩後輩の壁を越えて再び集まってきたのです。「同じ釜のめし」を食った仲間が一すじの時の絆に結ばれて。

社会人となってもファイト満々に飛びつづけるもの
ホームビルトグライダーの完成をめざして設計に励む
グループ、飛ぶことはすっかりあきらめてしまったが、
みんなと食べたり、飲んだりしたくて集まって来るも
の、いろんな職業人がいろんなところから集まって来
る。年に一度の総会ではいろんな出会いがあり、そこ
で交される対話は実に豊かで味わい深い楽しいもの
である。

総会などといえば大抵肩がこるようなものと相場が
定っているが、我々OB会の総会の待遠しい程に愉快
なのである。無論、総会だけでなく日常的に家族ぐる
みの交流があり、母校のこと、会員の消息等を盛込んだ
月刊のOB会報があり、それらすべての活動(?)が有
機的に結びついているから楽しいのではなからうか。

まだまだ生きの良さでは一流の山本和男会長、いつ
もにぎやかで、めんどろ見のよい飛山幸雄副会長、人
集めには天才的手腕を発揮する坂井正一郎副会長、そ
して郡山に残って学生の指導に大奮闘している橋本耕



(44年度総会のスナツプ
前列右から2人目 筆者(長沢))

吉君、まだまだこれからの日本を背負って立つ快男子
達は枚挙にいとまがない。

我々のOD会がどういふふうに生長して行くかは解
らない。そこに参加するものがそれぞれ期待するもの
をそこで削り出し、そして自分に必要なものを存分に
得ることができたらと願っている。正にエコノミック
アニマルと言われる人々の間で、少なくとも我々OB
会は参加者一人一人がその知識や経験や能力を提供し
ながらお互の破れを補い合えたら、更に一段と有意義
なものとなるだろう。

我々は時々つれだつて学生達の合宿を訪問する。学
生達の燃えるような熱気に接して忘れかけた「翼のう
た」を回復するのである。そのことによつて「飛ぶこ
と」を昔話としてしまうのではなく、いつまでも生き
たものとすることができる。

そしてそのことこそが我々グライダー部OB会のバ
ツボーンであり、楽しさの源泉ではないだろうか。

(筆者 電気工学科第10回卒業)



(44年秋の合宿訪問時に
左から坂井、山本、橋本、学生、長沢)

(工学部広報より抜萃・転載)

母校だより

1. 昭和45年度入学式行なわれた。

昭和45年度入学式は、4月16日、午後1時より工学
部大講堂において盛大に行なわれた。

式は来賓として、本村福島県知事、秀瀬郡山市長、
武田工学部校友会会長、川越工学部父兄会長等の諸氏を
迎えて行なわれたが、大学生として新しい人生のスタ
ートラインに立つ新入生諸君は、さぞフレッシュな若
さと、あふれるばかりの未来への抱負をいできて、今
日の入学式を迎えたことであろう。

激動の70年を迎え、さらに日新月异の技術革新時代
といわれる今日、特に工学部という高度の最新技術を
要求される分野では、鋭い理性と真理への真摯な態
度、そして正確な分析力と科学的、近代的感觉が強く
要求される昨今である。

大学生としての誇りや自信はあくまで厳正な理論と
現状認識の中で培われなければならないことはいふま
でもないことであるが、この流動する現代社会にふさ

わしい高度の学問研究と知識の把握によつて近代人と
しての成長が望まれる。

今後、4年間の大学生活がより有意義な内容の充実
したみのりあるものであることを切に期待したいもの
である。

2. 第1回大学院入学式行なわれた。

日本大学大学院研究科の第1回の入学式が、桜の咲
きほころ、去る5月1日、午前10時より、図書館5階
講堂に於て行なわれた。本学の歴史の新しい頁が開か
れたわけである。

式は、土木工学科2名、建築学科4名、機械工学科
3名、電気工学科4名、工業化学科2名、計15名の大
学院生と来賓、教職員多数出席して行なわれた。

外木次長より、大学院設置の趣旨について説明があ
り、第1回大学院生に対する期待と役割について要望
を述べられ、来賓の祝辞があり、続いて大学院生代表
者の宣誓があつて式は終了した。

校友会 ニュース

1. 788名の正会員と、1380名の準会員を迎えた。昭和44年度第18回の卒業式は、3月25日と4月5日の2回に亘り、それぞれ母校において行なわれた。

土木工学科 178名、建築学科 284名、機械工学科 125名、電気工学科 132名、工業化学科 69名、計788名である。

日本大学工学部の卒業生であり、同時に日本大学工学部校友会会員として迎えたわけで、校友の総数は7570名に達し、年を追って隆昌に向う姿は本当に力強い限りである。

次に本年度母校への新入生は1380余名で、校友会準会員として迎えたわけである。4年間研究一筋に進進されんことを切望するものである。

2. 昭和45年度あかしや奨学生決まる。

植田 明	電気工学科	1年
北 博行	建築学科	1年
尾之上 正文	工業化学科	2年
渡辺 富夫	機械工学科	2年
阿部 寿一	機械工学科	2年
白鳥 正昭	土木工学科	2年
佐藤 登	電気工学科	3年
藤田 悦子	工業化学科	3年
渡辺 則雄	建築学科	3年
大塚 孝義	土木工学科	3年

◎あかしや奨学生の感想文

(紙面の都合で2名分だけ掲載)

電気科1年 植田 明

このたびは貴会奨学生にお選びいただきまして、誠にありがとうございます。これまで買いたい本がかなりありましたが、その希望の半分程しか達せられませんでした。しかし今度は読みたい本を自由に読める身分になりました。これもひとえに皆様のおかげと感謝しております。

このところ私の学生生活はクラブに時間を費やし、夜の9時半頃帰宅することも度々で土曜日曜もないありさまです。クラブにもそれなりの意義は感じておりますが、時間が無いこととそれに伴う疲労は、しばしば勉強を妨げ余暇をうばいます。また反面それがかえって自分の生活を反省し、学習意欲を呼びおこすきっかけになるのだろうとも思っています。

ともあれ私は自宅通学でありますので、下宿している人達に比べればずっと恵まれているでしょうし、上級生に比べれば時間的にも楽なのかもしれません。今はただできるだけ有効に生活時間を配分し、勉学に専念できるようにしたいと思っております。

今後は貴会の奨学生たることに誇りと責任をもち、

大いに勉学にはげむつもりです。

建築3年 渡辺 則雄

此の度、奨学資金を受けることが出来て大変嬉しく思っております。また、両親も同じ思いであります。この奨学資金について私は初めて受けることになりました。他の人達は今までにも受けられておられた方々だと思います。この理由につきましては全く恥ずかしいことですがこの様な資金があることを全ぜん知らなかったのです。今年になって初めて友達からあることを聞いて知るにいたったしいです。

この様なことがあって、又私も少し書籍を集めたいと、特に専門書の不足、必要性を感じていたところでありましたので、一様は申し込むだけは申し込んでみようと思いたち手続きをしました。当てにはしまいと思っておりましたが申し込みの手続きがすんでしまうと何が何でも云う欲が出て来まして決定の連絡の手紙が来るのが待ち遠しくて今日の様に郵便受けを覗き込みました。

全く子供の様だと思われるでしょう。でも私はこの様なものに応募をしたのは全く初めてなので心の内がわくわくしたのだらうと思います。そして面接を行うので云々という手紙を受け取った時はしめたと思う気持ちとほっとしたと云う気持ちが入り雑った何とも言えない気持ちでした。

今回の支給された分は書籍類を購入しようと予定していましたが、製図用具が不十分なのでそっちの方に当てることにしました。

最後にもう一度御礼を申しあげたいと思います。ほんとうに助かります。有意義に使用します。

—校友会事務局からのお願い—

校友の名簿作成について

第1回から第18回卒業までの全校友を網羅した名簿を発行するため現在計画中であります。早ければ10月中にも完成したい考えであります。ついては下記の二点を大至急ご連絡下さるようねがいます。

- ① 連絡先・勤務先の変った方。又は当会からの通信宛名に誤りがある方
- ② 校友の中で当会からの連絡がつかないため、通信が行かない方——1人でも2人でもそうした校友がございましたならば、お互に連絡しあって当会にお知らせ下さい。

・正確な名簿であり、そして卒業生全員の所在を明確にしたいと念願しておりますので、何卒ご協力下さるようお願いいたします。

(表紙の説明 飛躍する新産都市郡山中心街)